地球にやさしい最前線⑧

田園風景の保全にも福音 安心・安全で省力化の小型田植機

ヤンマー

「高齢化」に頼もしい味方

辺り一面緑の水田地帯。日本はもちろん、モンスーン・アジア共通の〝田舎〟の光景だ。ただし、あくまでも「人工の自然」であり、荒々しい原野や原生林とは違う。人間が手をかけるからこそ存在できる「里山」であり、だからこそ、瑞穂の恩恵に与れるわけだ。

YR4Sシリーズ

翻って、「八十八の手間がかかるから〝米〟」とも言われるように、稲作は重労働である。一方、地方では以前から農業後継者不足が叫ばれているが、最近ではこれに現役の高齢化が待ったなしの状況となっている。このため、体力の限界や持病の悪化などを理由に農作業の継続を断念、その結果、休耕田や耕作放棄地とせざるを得ない事例が増えている。

これは、食料安保の観点からも由々しき事態であるのはもちろんのこと、保水力に優れる「田んぼ」の消失は水資源の減少や環境悪化、気温上昇に直結する、非常に悩ましい問題だ。

さて、こうした課題を解決すべく、高齢者でも手軽に稲作作業が続けられ、また重労働を敬遠しがちな若者が「農業」に参入しやすくなるような、「安心・安全・省力作業・簡単操作」を掲げた、画期的な小型の乗用田植機が開発された。

「YR4Sシリーズ」がそれだ。ヤンマー（本社・大阪市北区。山岡健人社長）が、農機の研究・開発で広範に提携する井関農機（本社：愛媛県松山市。木下榮一郎社長）と共同開発した〝力作〟で、7月1日に販売をスタートした。

同機には、畔（あぜ）道越えや田んぼへの出入り、坂道などでも安心して操作が行なえるようなアイデアや、苗、肥料の受け渡しが容易になるような設計・改良、誤操作による破損防止など、さまざまな「安心・安全・操作簡単」策がふんだんに盛り込まれているわけだが、中でも注目なのが、「省力作業」を追求した味付け部分だろう。

例えば、水田をならす際、田植機をいわばジグザグに往復させて行なう。しかし、機械をUターンさせる隅の部分は「枕地」と呼ばれ、この個所は通常機械による「ならし」が難しい。このため、整地用器具の「トンボ」を使った人力作業が普通で、これがなかなかの重労働。

これを解決するため、同機に「すこやかロータ」という機能を付加、旋回跡を綺麗に〝整地〟し、しかも枕地での田植も綺麗に、しかも楽にこなすことを可能とした。

加えて、「ミッドマウント施肥機」も搭載し省力化を追求。肥料ホッパを、あえて運転席の後ろに設置、機械の重量バランスが向上し、走行姿勢を安定させている。また、育苗・田植えに関するコスト、労力を軽減する「疎植栽培」も装備。レバーの切替えのみで、植付け株数を簡単に変更することも可能とした。さらに、同機の上位機種のF仕様には「温風ブロワ」を搭載、詰まり防止を施している。

この他にも、パワーステアリングや、「後輪独立スイング」機構など、まさに乗用車並みの〝足回り〟の心地よさにもこだわり、しかも軽トラックで簡単に輸送可能――まさに農家にとっての「福音」だ。